「ナインの若者の生き返り」（ルカによる福音書七章一一～一七節）

1　エリヤとイエス

死んだ一人の若者をイエスが生き返らせた、簡単にいえば、それが今日の箇所の内容です。

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうどある母親の一人息子が死んで、棺（ひつぎ）が担ぎ出されるところであった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた（一一～一二節）。

ナインという町でのことです。この町はナザレから一〇キロほど南東に位置するガリラヤの山間（やまあい）の町です。「町の門」とあるので、それなりに大きな町だったと思います。ただこの町は聖書ではここにしか出て来ません。ですから今日の話も、福音書ではここだけということになります。

夫を亡くした一人の女性、その彼女の大事な一人息子が亡くなった。どうして亡くなったのか、いくつであったか、何も書いてありません。「若者よ」と後でイエスが呼びかけているので、十代、せいぜい二十代の青年です。母親の悲しみ、苦しみはどれほどであったでしょう。しかしその息子がイエスによって生き返らされ、母親に戻されたのです。

じつはイスラエルには昔同じような若者の生き返りの出来事がありました。旧約聖書の列王記に出ています。紀元前九世紀、北イスラエル王国でのことです。

似た話が二つ伝えられています。一つは列王記上一七章（八～二四節）、預言者エリヤのおこなった生き返りです。下四章（一八～三七節）にもあります。それはエリヤの弟子、預言者エリシャによるものです。エリヤはイスラエルで一番有名な預言者の一人です。この話も知らない人はいなかったと思います。この旧約の物語にくらべれば、今日のナインの若者の生き返りの話はとても短いのですが、この場に居合わせた群衆も、弟子たちも、きっと、エリヤのこと、エリシャのことを思い起こしていたのではないでしょうか。

そしてまた、おそらくこの福音書の最初の読み手であった初代教会のユダヤ人たちも、ナインの若者の生き返りのことを、エリヤやエリシャの故事に重ねて読んでいたに違いありません。

さてその一つ、エリヤによる生き返りの話は、関係のあるところだけ簡単に申し上げれば、こうです。

イスラエル王アハブ（在位871-852）の時代です。干ばつで飢饉が起こります。エリヤは神の命令に従って遠く異邦のシドンのサレプタに行き、一人のやもめの家に身を寄せます。しばらくして、この女の一人息子が病気で死んでしまいます。女は、あなたは息子を死なせるために来たのかとエリヤにつめよります。エリヤは死んだ息子を

この母親から受け取り、彼を抱いて、自分が滞在していた家の一番上の部屋に行き主に向かって祈ります。そこから数節読んで見ます。

彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか」。彼は子供の上に三度身を重ねながら、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に返してください」。主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りてきて、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きている」と言った。女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある言葉は真実です」（列王記上一七・一九～二四）。

共通していることがいくつかあります。一番大きなところは、エリヤのときもイエスのときも、蘇生したのは、やもめの一人息子です。また、いま読んだところにはありませんが、エリヤがサレプタの女と出会ったのは「町の入り口」（一七・一〇）となっており、イエスも「町の門」で、葬列と出会っています。更に、生き返った息子を母親に渡した、返したというようなところも同じです。もちろん違ったところもあります。一番大きな違いは、エリヤが主なる神に対して祈っている、嘆願しているところです。そしてその力、祈りの力を及ぼそうとしてでしょうか（よく分かりませんけれど）、子供の上に覆い被さるパフォーマンスです。こうしたことはナインの若者の生き返りにはまったくありません。

2　憐れに思い

エリヤとイエス、重なるところがいくつかあると申しました。しかし違うところもあります。むしろその違いのほうが、印象深く残ります。

主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくてもよい」と言われた。そして、近づいて棺（ひつぎ）に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言いはじめた。イエスは息子をその母親にお返しになった（一三～一五節）。

何よりも、エリヤが祈った、嘆願したのに対して、イエスはそうしていません。むしろイエスご自身の言葉が、権威と力をもって、そのとき、そこで、出来事となっています。「起きなさい」という言葉とともに死人は起き上がってものを言いはじめます。イエスの言葉の力は圧倒的です。それゆえルカはイエスをここでたんなる預言者としてではなく、「主」と呼んでいるのです。

もっとも大きな違いは、エリヤが祈ったその動機に関わります。はっきりしません

けれど、エリヤの場合は、この女に問い詰められて、というところがあるように見えます。

しかしイエスの動機ははっきりしています。それは、母親を見て「憐れに思い」という言葉に表されています。その思いが、すなわち、悲しむ人、苦しむ人、貧しい人への思いがイエスの行動の根源にあったのです。「憐れに思い」という言葉は大切な言葉なので、後でもう一度取り上げることにして、この思いから出た二つのことをはじめに確認しておくことにします。

一つは言葉です。憐れみの思いから、「もう泣かなくてもよい」というイエスの言葉が生まれます。平地の説教を私どもは思い起こしていいと思います。「今泣いている人々は、幸いである。あなた方は笑うようになる」（六・二一）これが神からいただく私どもの慰めの福音です（Ⅱコリ一・三～七）。

もう一つ、憐れみの思いは、棺に触れるという行為を生み出しました。この棺には蓋がなかった可能性もありますし、あるいはただの板のようなものに乗せて担いでいたのかも知れません。ですから死体にイエスは直接触れたのです。それは汚れたものに触れる、その意味で掟を破るということもあったと思いますが、それ以上に、死の力の行進を阻む、当たり前のように進んで行くその無言の行進にストップをかけるということでありました。果たして、担いでいる人たちは立ち止まりました。命の力が働く備えをなしたのです。

さて、先ほどの「憐れに思い」に戻ります。ここで使われている単語（スプランクニゼスサイ）について、著名な古典学者ウィリアム・バークレーが、一種の革命をその中に蔵している言葉の一つだと書いています（『新約聖書ギリシア語精解』）。

元になっている名詞（スプランクナ）の意味は心臓、肺、肝臓などの内臓です。それが憐れに思うという意味で使われています。ギリシア人はそれらの内臓、つまりお腹、そこに、人間の感情の座があると考えたからです。もともと内臓を表す言葉が同情を表すもっとも強い言葉として用いられているのです。

聖書のどこで使われているか申し上げれば、その重要さがお分かりいただけると思います。まずイエスの譬えの中で三回使われています。そのうちの一つ、ルカ一五章の有名な「放蕩息子の譬え」では、帰ってきた息子を父が迎えに出る場面で使われています。「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って」（二〇節）。さらに有名な善きサマリア人の譬え（一〇章）にも出て来ます。傷ついて倒れている旅人を見つけたサマリア人について、彼は「そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って」（三三節）とあります。もう一つは省略します。

譬え以外では、この言葉はイエスにしか使われていません。今日の聖書箇所が代表的な箇所です。そのほか一つ挙げれば「群衆が飼い主のない羊のような有様をイエスは深く憐れみ」（マルコ六・三四）という聖句があります。

ところでバークレーが一種の革命を蔵している言葉といったのは、いま申し上げたことに含まれています。聖書の神は、同情を感じる、憐れに思う、つまり動かされる神です。これに対してギリシア人にとって神は動かされてはいけないのです。動かしているほうが上なのです。聖書の神は、それとは反対で、民の叫びに動かされ、人の痛みに動かされて、降って行く神（出エジプト三・七～八）です。ここに神理解、神

信仰の革命的な転換があると、バークレーは教えています。

3　その民を心にかけてくださった

イエスの言葉と行為、その根源にある思い、それが「憐れみの思い」でした。イエスはナインのやもめに心深く動かされたのです。

こうして一人息子を亡くしたやもめ、この一人の女性に、イエスの憐れみは注がれました。彼女は夫を亡くしただけでなく、もっとも頼りとした一人息子を失ってしまったのです。それは人間的な支えをすべて失うことを意味したのです。

しかし神の支えまでも失ったのではありません。イエスが息子を生き返らせて母親に「お返しになった」ことは、その証しであり、しるしでありました。しかしそこに居合わせた民衆、彼らはこの出来事に、気の毒な一人の女性の救いを見ただけではありませんでした。そのことは、目の前で起こったことに「恐れ」を抱きつつも、次のように神を賛美したことに表れています。

「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった（一六～一七節）。

このナインの若者の生き返り、よみがえりの出来事は、民衆にとって、神がその民を心にかけてくださった、神がなおイスラエルを憐れんでくださっているしるしでもあったのです。

神の民イスラエルとはそもそも何であったのでしょうか。先祖アブラハムに示された神の言葉によれば（創世記一二章）、イスラエルとは、諸国民の、世界の民の救いの基となるべく神に選ばれ、その祝福を許された者たちです。彼らから始めて諸国民が救われ、神の国がなる基礎なのです。

しかし残念ながら、イスラエルは、そのような民として歩んできたとは言いがたいものがありました。現にローマの支配下にあって、神の御心とは別の方角に向かって民を指導する宗教家たちの力が、ここかしこで力を振るっていたからです。しかしそうした長い暗い時代も、終わりつつあるのでしょうか。ナインの若者の生き返り、イエスの力あるみ業は、そのことへの期待を膨らませるものでした。神は再びわれわれを訪れて下さっているのだと。

ナインの若者の生き返り、それは、蘇生という範囲に入る出来事です。若者も、これをもって死から生へと、つまり永遠の命にあずかったわけではありません。しかしそれは、死に打ち勝つ命の、復活の命の、永遠の命の確かなしるしであったことは間違いありません。それだけではありません。この若者の生き返りは、私どもにとっても、心の深みから新たにされ、神の霊に生かされて歩む、いわばこの世にあって生き返りを生きている私どもにとっても、力と励ましを与える出来事であります。そのようなものとして受けとめることができれば幸いです。

（二〇二一年七月四日）